

★ 第二回 院内集会 後半

日時： 5月25日（水） 13時00分～14時00分

場所： 参議院議員会館 B104 会議室

山田 ご存知の通り現在は政府と東電の間で、我々の知らないところで物事が動いている状況です。我々が行動をする、作業をするということで部隊を作ってポンと持って行って、どこにはまるかという、今動いている体制の中ではまるところはないと言っていると思います。現在の作業部隊は下請け孫受けに雇用されて入るという道しかない。昨日見せてもらったんですが錦糸町のハローワークで一日何万円という求人が来ております。年齢60歳未満ですが。そういう所へ行く以外に入る道はありません。ですから全く新しい作業体系、仕事をする体系を作り変えないと駄目ですね。政府が東電になんとかしろよと言って、東電がなんとかしようとかがんばっているというのが今の仕事のスタイルです。ですからこのままの形で我々がなんとかするよって話をしたって、なんにもなできないというのが悩みなんです。これを全く新しい仕事の形に、あるいは事態収拾活動の仕組みの構造を変える、ということをしなければいけないと考えます。この点について私が呼びかけを始めてから今日までひと月と三週間ぐらいだと思いますが、いろんな形で声をかけて来ましたが、政府の関係、国会議員の方々、牧村先生みたいに激しく動いてくださる方は初めてでございますけれども、この間いろんな方に働きかけてきまして、東電にも働きかけました。私の理解では政府のトップ、管さんまで含めてほとんどの方の耳に、私どもがなにか言ってるということは届いております。具体的にそれをどうしようかという議論が始まるとっかかりのところに来たかな、というのが私の今持っている情報なり感じです。大変申し訳ございませんが、ここまでお話しすればお分かりになると思いますが、政治の非常に微妙なところに関わりますので、お名前を申し上げることは残念ながらできませんが、非常に面白いところまで来たということだけは自信を持って申し上げることができます。

伊藤 山田さんと大学の同級生で、放射線を測りながら、放射性物質を濃縮するとか分離するとかいう実験をしていた者です。さっきから決意表明とか決死隊とか大げさな話がでておりますけど、私の感覚では年寄りの暇つぶしのボランティアです。することがない人がいっぱいいるわけですね。確かにあんな若い人にやらすのは見てられないですよ。ですからどうせ何十年も生きない、どうせ影響なんて現れないうちに自然死するというような人が行くべきなんですよ、というのが自分の意見です。自分のできることはせいぜい瓦礫拾いと計測器ですね。計測器で計測してデータを統計するとか、そういうことはできますが、まあその程度ですね。国会議員の先生にお願いしたいのは、なんせ我々もそうですが、国民は原発のことを知らな過ぎる。私大学の先生をしていて、こんなに知らなくていいのかなと思って、授業で何回か議論したことがあります。福島原発も見に行きました。中に

入ってみて私がその時受けた印象は、「これは俺の手に負えない」でした。これ、なにかあったら俺の手に負えない。働いている所長以下も私と五十歩百歩の人だから、これは手に負えないなと思いました。案の定そうになりましたね。そうならないことを祈っていたんですけど、なってしまった。だけど私がいつも言ってるのは、人のせいにするなです。みんな自分が悪いんです。ですから自分でやるしかないということで参加することにしました。

牧山議員　ここで社民党の衆議院議員の服部良一先生にコメントをお願いします。

服部議員　昨日も会合が持たれたということで、うちの秘書が出席をしまして、「すごい熱気やで、今日は絶対行きや」と言われてここに来ました。この中には原子力のいろんな研究だとか、プラントの建設工事なんか積極的に関わってこられた方、会社に勤めてしゅしゅ仕事をしていた方もいらっしゃるかもしれません。僕も33年間機械メーカーにおりまして、原子力発電所でも何回も仕事をさせられた。反原発を言いながらです。会社を辞めるわけにもいかず仕事をしてきた経過もあって、みなさま達の、なんと言うか、今までそれを許して来た責任、あるいは関わってきた責任として後世に汚点を残さないようにがんばりたいという気持ちが、いやというほど私も分ります。ただ私はベースが営業だったので、たぶん私が行ってもあまり役に立たないと思うんですが、いずれにしても社民党として2020年には原発をゼロにするというアクションプログラムを作って、昨日管総理にも渡して参りましたので、私自身は国会の責任として、政治の責任として原発をやめて自然エネルギーに大きくエネルギー政策を転換してゆくためにがんばってゆきたいと思えます。現場はまだ非常にリスクの高い環境が続いておりますし、そこでどういう形でなんの仕事をするのかというのは技術的にもいろいろとハードルが高いことだと思いますし、受け入れ側がどういうふうに判断をされるのか。しかし例えば福島の飯舘村に行きましたが、あそこでも若いやつは飯舘村から逃げると、60歳以上でこの村を再建するんだというわけで、そこでも60歳以上というのが出ています。我々の世代が使い放題に電気は使って原子力発電を生み育てて、我々の子供や孫の時代に核のゴミだけを残していくというのは、これはもう絶対に許しがたいことだと思いますので、その思いを共有しながら皆さんと一緒にがんばって参りたいと思えます。

牧山議員　引き続き質疑応答の時間なので、ご質問のある方よろしくをお願いします。

??　八王子からきました。61歳です。なぜここにお邪魔させて頂いたかということ、小出さんのお話を伺って、あの人自身も責任を非常に感じてらして、すぐこの会にもお入りになったということ、もう一人は孫正義さんが、やらなきゃならんことがあるということで記者会見に臨んでおっしゃったこと、それから元GEの技術者が、原発がいかにかいい加減なプロセスで作られたかを語っていることがあります。例えば溶接の免許も持ってない

ような人間が施工所でなんか作っているとか、いろんな話をネット上で発表されている。そんなことをずっと見てきますと、それまで気が付かなかったこと、この事故が起きなければおそらく死ぬまで電気を使い続けていただろうなということが、自分で許せないような気分で、機会さえあれば今までやってきたことを償う意味でなにかやりたいという気持ちでいっぱいになって、今日参加させて頂きました。私は機械系じゃなくてすみません。自分では支援隊と言っているんですけど賛同者です。今自分で仕事をしていて、ほとんど四六時中徹夜状態の作業でテクニカルなことをやっているんで動けないので、いい加減なことを言っちゃいけないと思って支援隊にまわっていますけれども、もう少したって時間ができて駆けつけられる態勢になったら、あらためて登録させて頂きたいと思います。

そこでいくつか質問があります。ひとつは名称について。この暴発阻止という暴発の概念ですが、例えば1号機がメルトダウンして、2号機3号機ももうメルトダウンしていると昨日辺り発表していましたが、そうするとおそらく格納容器も、これ小出さんのお話ですけれども、私は信じているのでそのまま右から左へ申しあげますと、もうまわりの格納容器すら維持できていないかもしれない、下の厚いコンクリートに2800℃の溶けたものが1500から600℃で溶けるコンクリートを溶かしつつ下に沈降しつつあるのではないかという最悪のことを考えているのです。小出さんのご判断ではもう石棺しかないともおっしゃってる。1号機2号機3号機なんて、主要なあそこの部分をこれからパイプを繋いだり外に冷却システムをくっつけたりなんて言っていると、もうやる意味もなくなった場合、この暴発という概念が何を意味するのかを、今のうちから考えておかなきゃいけない。同時に考えなきゃいけないのは、暴発を阻止する行動隊っていうのは原子炉のそばに行ってあれを着て10分20分の作業で引き上げてきて、それで若い人の代わりに作業をやるというイメージが固定化しつつありますけれども、では私達のような賛同者は何もしないで後方部隊でやっているのか。例えば校庭で削った土、あれ今積んでいますが、これは法整備が進まないから原発敷地に持ち込むことは禁止されているようですけれども、政治家の方々にはあれを議員立法でもなんでもいいから原発敷地の中に運ぶような法律を作って頂いた上で、あらっばい作業とか技術が要るようなことはできないんですが、週一ぐらい行ってその土を運ぶ、あれを着てかなり線量の高いところへ10分20分潜り込んで置いてくるぐらいの覚悟はできています。そういうことをやるやつがないのなら、この後方隊でも私はできると思うんです。ですから原発の暴走っていうか、今メルトダウンしちゃっていますけど、そこからどんどん揮発性の放射性物質が飛んで散りますよね。毎日出ているわけです。これをいかに早く止めるかが暴発阻止だとすれば、それまでの間どんどん飛んで汚染されているところに出向いて行ってそれを少なくとも軽減してゆく作業。それと20ミリシーベルトは政治家の方、もういい加減に止めてもらいたいんだけど、あれを早く1ミリに戻すという作業。それが全部連動してここが中心でやっているんだよという、ひとつの広報活動をすることによって、単に老人が集まって、暇つぶしでもいいんですけれど命懸けの暇つぶしですよ、ある意味では。それでもいいんだって開き直っ

て行くわけですから自業自得で死ねればいいと思っただけです。でも多くの人が見たときに、本当に勝手にやっていると思われるんですね、それが原発推進の人達からうまく利用されて、あいつらは元技術者が集まって好きなことを言っているけど結局素人だと。目に浮かぶんですよ、そういう報道がそのうち出てくること。あいつら100人集まったって200人集まったって、土建屋だったり建築屋だったりいろいろちょろちょろやっているけど、原発の複雑なプラントなんて分るわけがない。だから何人集まったってネジ締めたりボルト締めたりするぐらいだろうと言われて、もともと山田さんはそれでいいんだとおっしゃっていますよね。ボルト1本締めるだけでもいいじゃないかと。でもそれを逆手に取られてそう言われると、世の中の人達は「なーんだ」ってことになりかねない。読売新聞なんてすぐ書きかねない。私は元朝日なので言うわけじゃないんですけど、そこら辺をこれから用心して、もうちょっと多くの人達を年末までの間に一万人規模ぐらいにもって行って、その中には20代でも30代でも40代でも危険度を減らしてゆけば参加してもらえるような枠も含めて、もっと広範な国民的なプロジェクトにもっていくことを、ぜひ考えて頂きたいなと思いました。

山田 大変重要なご指摘で、我々が考えなきゃいけないと思っただけを全部言われたという感じがします。一つは、まず原子炉自身がどういう結末になるかということ。このまま収まるという可能性をかなり持っていることも事実ですが、収まらない可能性もあるので、今のところ気を緩めないで見ていくしかないだろう。もし収まったとしても、今ご指摘があったように非常に広い範囲の問題、環境の問題があり、農作の問題があり、漁業の問題があります。それが縦割り行政の中でそれぞれバラバラにやっているものだから、てんで手に負えない、というような話も聞いております。そういう点で我々が一つの部隊としてきちっとした仕事を一貫してやる、ということを提案するようなことが充分にありうると思います。昨日の集会の時に、避難民の方々のケアというところまで含めて仕事の対象にしてゆくべきだという提案もありました。もう一つの提案は、他の原発もまだあり、これがいつ暴発するか分らない、そのための部隊を恒久的に作ってゆく。つまり非常時のために消防の特別部隊がありますね、それと同じような原発の事故に対する特別部隊が作られてもいいじゃないかという議論もありました。そういうところまで考えて動くのはちょっと我々には荷が重い。私も72歳ですし、そうなるとうちは国へのバックアップが必要になる。しかも官僚組織をきちっと使って。しかしさっきから言っているように権力からも独立し、企業からも独立している部隊がちゃんとできあがるということが、いろんな意味でどうしても必要だと考えます。そういう意味で、今政府と東電に働きかけているこの姿勢をベースにしてワークスコープをどう変えてゆくか、変わってゆくかが状況に応じて議論の対象になると思っております。その組織が具体的に動いた時には、私が中心になって組織を運営することでは決してない、ということだけはご理解頂きたい。これは私の能力をはるかに超える重大な課題だと思います。